

## 研究報告

# アメリカハワイ州B島で母乳育児を選択した外国人女性のケアニーズ —日本人助産師が開業している母乳育児クリニックでの インタビュー調査から—

The Care Needs of Foreign Women who have Chosen to Breastfeed on Island B  
in the State of Hawaii, in the United States

—Based on the findings of survey interviews conducted  
at a breastfeeding clinic run by a Japanese midwife—

小嶋理恵子<sup>1)</sup>, 曾我部美恵子<sup>1)</sup>

1) 関西看護医療大学大学院母性看護・助産学

Rieko Kojima, Mieko Sokabe

Kansai University of Nursing and Health Sciences Maternity Nursing & Midwifery

**要旨：**【目的】母乳育児などの親としての役割に関係する行動は、その国の文化や社会制度に影響されることがある。今回、アメリカハワイ州B島の日本人助産師が開業しているクリニックに、母乳育児継続のために受診してきた外国人女性6名に対するインタビューを行った。そこで得られたデータから、外国人女性の母乳育児に対するケアニーズが明らかになったので報告する。【対象と方法】研究デザインは質的記述的研究である。6名の外国人女性に対して、研究者が作成したインタビューガイドを用いて、半構成的面接法によりデータを収集した。外国人女性への健診場面でのインタビューは通訳を介して正確なデータを得るように努めた。【結果】研究協力者6名から得られたデータを分析した結果、外国人女性の母乳育児に対するケアニーズとして、【不安なく母乳育児を継続するために入院中に必要な知識や技術を習得したい】、【母乳育児を通して母親役割を遂行したい】、【機械的ではなく親身な援助を受けたい】、【母乳育児を続けるために、家族も含めた指導を受けたい】、【医療者の母乳育児に対する指導内容を統一して欲しい】、【働く女性も母乳育児が継続できるように職場や同僚への啓蒙活動をもっとして欲しい】、【確かな技術を持った助産師に継続的にケアを受けたい】という7つのカテゴリーと14のサブカテゴリーが抽出された。【結論】母乳育児を希望する女性は、退院して初めて自分の母乳育児に対するケアニーズに気づいていた。これらのケアニーズは、母乳育児を希望する日本人女性のケアニーズと同様であった。また、日本人助産師のケアは、文化的に異なる背景の対象者にとっても必要なケアであり、母親として母乳育児を希望する女性に必要なケアでもあった。また、働く女性が母乳育児を続けるためには、社会制度や職場の理解が必要であることも明らかになった。

**キーワード：**外国人女性、母乳育児のケアニーズ、日本人助産師のケア、ケアの継続性、家族や周囲の理解

**Keywords :** breastfeeding care needs Japanese midwifery continuity of care

## I. はじめに

本学では、大学院助産師課程の母性看護・助産学実習の中で、国際的な助産活動に参加する科目を設けている。実習受け入れ先の一つに、日本人助産師がアメリカハワイ州B島で開業している母乳育児のクリニックがある。そこでケアを受けた母乳育児中の女性の人数は、2012年から2014年7月までの2年半をみても、延べ3000人に上る。そして、そこにくる女性は日本人だけでなく、アメリカや他の国を母国とする文化背景の女性も多く受診しており、第1子、第2子と継続してこのクリニックに通院している人もいる。たとえ対象者の国籍が異なっても、助産ケアの本質は同じであるが、外国人は、私たちとは異なる国の文化的背景を持ち、その文化によって伝達されてきた価値・信念・規範・生活様式の中で生きてきた人々である (Alice, 2002/2010)。

特に母乳育児は、母親役割に伴う行為であり (小嶋, 尾筋, 2014), 彼女たちの思考・意思決定・行動には自国の文化が反映される (レイニンガー再掲)。先行研究では、外国人女性と、日本人助産師という異なる文化的背景を持つ関係性において、女性の価値観や認識と異なる母乳育児ケアに不満と疑問を抱く場合があることが明らかにされている (杉浦, 2008)。また、日本人女性の母乳育児に対するケアとして、助産師が「母親の気持ちの支持」をすることが重要であること (野口, 1999) が明らかになっているが、対象の文化によって異なるのかどうかについての研究は見当たらない。そこで、本研究では、外国人女性が母乳育児を継続していく上でのケアニーズに焦点をあて、具体

的な助産師の支援を考察することにした。

## II. 研究目的

母乳育児クリニックに通院している外国人女性の母乳育児に対するケアニーズを明らかにすることで、日本で母乳育児を希望する外国人女性に対する援助方法の示唆を得ることを目的とする。

## III. 研究方法

### 1. 研究デザイン

質的記述的手法を用いた。この手法は前提として、人は様々な社会的文脈で他者と関わりを持ち、それらの経験をその人の現実として語るができるという立場にたつ。また、研究者が語られた現実を抽象化して記述することで、研究対象の現象を理解するための方法である (グレッグ, 2007)。

### 2. データ収集期間

2014年8月29日～9月3日

### 3. 研究協力者

本研究の対象者は、データ収集期間に、日本人助産師が開設している母乳育児クリニックを受診した女性19名のうち、助産学院生の受け持ち対象者を除いた外国人女性とした。結果、6名が対象者となり全員から研究に協力することの同意が得られた。

研究協力者の背景は以下の表1のとおりである。

### 4. データ収集方法

日本人助産師から母乳育児のケアを受けている

表1 研究協力者の背景

研究協力者	文化的背景 (本人の認識)	年齢	出産回数・出産様式	受診理由	協力者の有無とその内容	母乳期間
A	ハワイアン	20代半ば	第1子経陰分娩 (硬膜外麻酔分娩・陣痛促進剤使用) 現在第2子妊娠中	右側に硬結があり、乳癌を心配して病院受診。癌は否定されたが、友人から助言され、日本人助産師のクリニックを受診。	実母を亡くしているが、夫や家族・親族・友人の協力を得られている。職場の同僚も母乳育児を行っており、周囲の理解もある。	1年7か月
B	ハワイアン	30代後半	第1子経陰分娩	2回乳腺炎になり、両乳首も亀裂。分泌量も少なく、体重も増えなかった。病院では粉ミルクに変更するよう指導されるだけで、母乳育児について教えてもらえなかったのが不安で日本人助産師のクリニックを受診。	未婚であるが、相手の男性からは経済面でのサポートを受けている。両家家族の協力と理解がある。	1か月

C	ハワイアン	30代後半	39週で誘発分娩を試みたが血圧が上昇し、緊急帝王切開で出産。(第1子)	37週時に日本人助産師の初診を受けて母乳育児についての説明を受ける。出産後は、赤ちゃんの吸い付きが悪く、胸がはっていた。右乳房のしこりがあり、右乳首も固くなり吸いにくくなっていた。出産後3日目にクリニックに再診。	パートナーの男性(未婚)は母乳育児にとっても協力的である。双方が、できるだけ現代の医療ではなく、代替医療などを用いての自然育児を希望している。	10ヶ月
D	ミクロネシア	30代後半	1人目死産、2人目(2歳半)3人目(8か月)を経膣分娩	自分の子供には一番良いもの(栄養)を提供したかった。母乳育児についての良い面を周りから聞いていた。3人目が36週になった時に日本人助産師のクリニックで妊婦健診を受ける。一人目は当初3か月くらい母乳を与えればという思いだったが、1年3か月母乳育児を行った。2人目も最低1年は母乳で育てたいという希望がある。	出産後10日後に乳房緊満があり受診し、その後も定期的に受診。家族、特に夫は母乳育児に協力的であるが、ベビーシッターから「ミルクを十分に与えていない。もっと与えない」と言われることもある。	8ヶ月
E	ハワイアン	40代前半	誘発分娩後帝王切開	病院に入院中から子供の吸い方に問題があったと認識している。2か月ほど、ほかのラクテーションコンサルタントの所に通院。しかし、症状が軽減しないので、日本人助産師のクリニックを受診。	現在、フルタイムで仕事をしているが、夫は母乳育児に協力的である。昼休みには、実父が職場と家の送迎を引き受け、家で直接授乳ができるように協力している。義母はベビーシッターが必要な場合に援助してくれている。	2年7ヶ月
F	ハワイアン	30代半ば	経膣分娩	妹が先に妊娠し、日本人助産師のクリニックに通院していたので、同行していた。彼女自身が妊娠した時には、同クリニックで妊婦健診を受けていた。出産した施設では、乳房緊満のため、赤ちゃんの吸いつきが悪かった。また、完全母乳を希望していたが、看護師にミルクが足りていないと言われ、粉ミルクを与えていた。退院後は粉ミルクを与えたくなかったので同クリニックを再診した。	家族、特に同クリニックに通院していた妹の理解と協力は大きい。夫は母乳育児に理解を示している。自分としてはできるだけ長く母乳を続けていきたいが、周囲から「そろそろ断乳したら」という意見に不安になることもある。	1年3か月

外国人女性に対して、研究者が作成したインタビューガイドに基づき半構造化面接を行った。面接は、他の受診者と交わらないように環境を調整し、対象者の許可を得て、ICレコーダーに録音を行った。インタビューガイドでは、妊娠・出産・子育てはどのような意味を持つか、どのような援助が役に立ったか、母乳育児についての思いなどについて語ってもらった。また、対象者に質問の意図が正しく伝わるように、日本人で英語の堪能なクリニックのスタッフに通訳を依頼した。また、対象の出産様式、基本的背景については、日本人助産師からデータを収集した。インタビューおよび参加観察の時間は、40分から1時間14分であった。

## 5. 分析方法

分析手順としては、まず、インタビューデータを逐語録に起こした後、再度インタビューデータを聞きながら内容を確認した。その後、対象のケアニーズを表している内容を抽出し、一次コーディングした後、サブカテゴリーを抽出した。サブカテゴリーの類似性をもとにカテゴリーにまとめた。

## IV. 倫理的配慮

ケア場面に入らせていただく外国人女性に対して、英語で作成した説明書、同意書を準備した。協力者には、正確に伝わるように通訳を介して、研究の目的、方法、対象者の権利と研究者の守秘義務を伝え、本研究の結果を公表することを口頭および書面で説明し、研究承諾書への署名を得た。本研究は、関西看護医療大学倫理審査委員会の審査を受けて承認を得ている(承認No48)。

## V. 結果

### 1. フィールドの紹介

まず、今回の研究フィールドとなった地域に対する説明をする。アメリカハワイ州B島は、各国から移民が来た州であり、生来そこに住んでいた人々の文化だけでなく、移民によってもたらされた様々な文化が共存する地域である。今回、研究協力者の中で1人は純粋なハワイアンの家系であった。しかし、他の女性については、その家族をたどっていけば、日本やフィリピンをはじめとする東洋系、欧米系、ハワイアンなど様々な国のルー

ツを持っていた。しかし、1名を除いて残りは全員「ハワイアン」であると答えた。インタビューをする中で、同じ「ハワイアン」と答えた女性でも、出産介助を行う伝統的な産婆による妊婦マッサージや自宅出産を希望していた人や、胎盤を持ち帰った人、妊娠したことを独特なレイ（輪になっていない花飾り）をかけて表現するなど文化も継承している人がいた。これらの動きは政府がハワイアンの産育習俗を尊重する法律改正を行っていることに起因していた。また、医療制度はアメリカ本土の影響を受けているため、出産の入院期間は、2日～3日である。しかし、ハワイ州B島は家族間、親族間のサポートが強く、今回の調査対象者のほとんどが、保育園での送迎や、ベビーシッター等で家族間、親族間のサポートを活用していた。特に郡部では、親戚が近所に住んでいる場合も多く、親族間の相互扶助が充実している。また、姉妹間でお互いの子供に母乳を与える、いわゆる「もらい乳」の文化によって子育てを互いにサポートしている。また、母乳を与えることは、母親として自明のものであるため、2歳～3歳まで母乳育児を行う。政府が、母乳育児を希望する女性への対策として、企業に授乳室や搾乳室の設置を義務付けたが、制度は十分でないところもあり、また、郡部の家族と離れて生活する女性たちは、短い入院期間では、母乳栄養を継続するための方法やセルフケアの知識を得ることができないことでの不安を抱いていた。このような現状から、地域で母乳育児専門のクリニックを開業している日本人助産師のところには、日本人だけでなく様々な文化背景の女性が受診している。

## 2. 抽出されたカテゴリー

研究協力者6名から得られたデータを分析した結果、外国人女性のケアニーズとして、【不安なく母乳育児を継続するために入院中に必要な知識や技術を習得したい】、【母乳育児を通して母親役割を遂行したい】、【機械的ではなく親身な援助を受けたい】、【母乳育児を続けるために、家族も含めた指導を受けたい】、【医療者の母乳育児に対する指導内容を統一して欲しい】、【働く女性も母乳育児が継続できるように職場や同僚への啓蒙活動をもっとして欲しい】、【確かな技術

を持った助産師に継続的にケアを受けたい】という7つのカテゴリーと14のサブカテゴリーが抽出された（表1参照）。以下、文章中では、サブカテゴリーを〈 〉、カテゴリーを表している語りは【 】で表した（表2参照）。

1) 【不安なく母乳育児を継続するために入院中に必要な知識や技術を習得したい】というカテゴリーは、〈母乳育児を継続するために必要な知識や技術を習得したい〉

〈児の成長に合わせた母乳育児の方法を知りたい〉という2つのサブカテゴリーで構成された。これらのケアニーズは、自宅に戻り児の世話をすることで強く感じていた。例えば以下のような思いが語られた。

「(退院してしばらくは) 本当にこれで良いのかという思いがずっと思っていた。病院では、見回りにきて、「大丈夫」と言われるけど、どこが大丈夫なのかは教えてもらっていない。」

「(入院した施設の) ラクテーションコンサルタントは、チェックだけ、時計をちゃんとみて30分以上吸わせたらダメよというだけ。ベビーが落ち着くまで、授乳が30分以上かかるけど、そんなに長くしてはダメといわれた。フラストレーションだけが溜まった。ここ(日本人助産師のクリニック)に来て、彼女から、「吸ったり、外したりの繰り返しかもしれないけど、時計じゃなくて、赤ちゃんをみて、赤ちゃんが満足するまで上げていたらいい」と言われて、これで良かったんだと思った。納得できたし、赤ちゃんの成長が変わってくるという実感もあるから、友達にも伝えている。」

2) 【母乳育児を通して母親役割を遂行したい】というカテゴリーは、〈母乳育児を通して母親役割を遂行したいという思い〉という1つのサブカテゴリーで構成された。

ある母親は、以下のように語った。

「自分の中でおっぱいをあげるということは母親として理想のことだったので、それを(日本人助産師は) ゴールにしてくれて、サポートしてくれる。他の医療者から言われて不安になった時には、ここに来れば、励みにもなるし、自分がやっていることに対して、サポートしてくれて母親としての自分を強くしてくれる。物理的なケアや医

療的なケアだけでなく、もっと深いものが得られる。」

3)【機械的ではなく親身な援助を受けたい】というカテゴリーは、＜機械的な対応ではなく親身な対応をして欲しい＞、＜困った時にすぐに相談したい＞という2つのサブカテゴリーから構成された。今回の研究協力者からは、入院中は、ラクテーションコンサルタントが巡回にくるまで相談ができなかったこと、またチェックをするだけであり、親身な対応ではないと感じていたことが明らかになった。また、退院後も別のクリニックでは、十分に自分の思いを聞いてくれず機械的な対応を受けたと感じている母親もいた。

「最初に行ったクリニックは、話しても「はい、はい」というだけで機械的な感じでの対応で、受診した後も不安でいっぱいだった。」

「(病院での) 指導は、パンフレットを渡されただけ。」

「(日本人助産師) は、良き友であり、彼女はとてもオープンで、相談や悩みがあれば、すぐに相談できる。」

4)【母乳育児を続けるために、家族も含めた指導を受けたい】というカテゴリーは、＜親世代に対しても母乳育児のメリットについて教育をして欲しい＞、＜母乳中心の生活にするために家族間のサポートが得られるようにして欲しい＞という2つのサブカテゴリーから構成された。様々な人種を背景に持つ女性たちは、異なる価値観を持つ親の意見にプレッシャーや葛藤を感じていた。そのため、家族に対しても指導をして欲しいという思いを持っていた。

「(母乳や人工乳の) メリットデメリットさえも知らなかった。自分の親の世代はミルクを推奨されてきたから、母乳育児を中心に考えて生活を組み直すという発想もない。ここ(日本人助産師のクリニック) に来て、それがわかった。」

「ただ単に母乳育児を希望する女性だけに教えるとかではなくて、家族にもケアや指導が必要。私が、日本人助産師から学んだこと。」

5)【医療者の母乳育児に対する指導内容を統一して欲しい】というカテゴリーは、＜根拠を踏まえた指導をして欲しい＞、＜看護師間で指導内容を統一して混乱しないようにして欲しい＞という2つのサブカテゴリーから構成された。ある女性は、以下のようにその理由を説明した。

「(1歳半の子どもの健診時に) 小児科医から、「いつまで母乳をやっているんだ、栄養は他からもらえるから、もうやめろ。」と理由も説明せず叱られた。」

「入院中、病室にくる看護師さんたちが(母乳育児について) 違うことを言うので混乱した。」

6)【働く女性も母乳育児が継続できるように職場や同僚への啓蒙活動をもっとして欲しい】というカテゴリーは、＜男性の上司に母乳育児の重要性について理解して欲しい＞、＜職場に搾乳の場所を作って欲しい＞、＜母乳育児を継続するために搾乳することを同僚に理解して欲しい＞という3つのサブカテゴリーから構成された。アメリカではオバマ政権で策定された法律によって、母乳育児を支援する取り組みが行われてきている。しかし、法律はできても、周囲がそれを受容しないことで、職業を持っている女性たちは母乳育児を継続するうえで困難感を抱いていた。

「大統領が法律をつくったけど、職場の上司が男性で搾乳のことを理解してくれない。」

「自分はベビーシッターが家に来てくれるから、お昼休みに家に戻って母乳をあげている。でも、女性の同僚にも理解してくれない人がいる。栄養のあるミルクをあげればいいのにと言われる。」

7)【確かな技術を持った助産師に継続的にケアを受けたい】というカテゴリーは、＜母乳育児に対するケアを継続して受けたい＞、＜乳房トラブルを予防するために確かな技術を持った助産師にケアを受けたい＞という2つのサブカテゴリーから構成された。

外国人女性たちは、このクリニックに通う理由を以下のように語った。

「アメリカでは多くの人が安易に人工乳を与える。それは簡単で便利だと思っているから。だから、ここでは「母乳をあげたい」という強い思い

を持たなければ続けられない。彼女みたいに母乳栄養を継続してケアしてくれる助産師がもっと増えると母乳の率も高くなると思う」

「最初のマッサージの時に、乳栓を出してくれたので通っている。ここではそういう技術を持っている人は彼女しかいない。」

## VI. 考察

### 1. アメリカハワイ州B島で母乳育児を希望する女性の母乳育児支援の現状と課題

今回の調査結果である、【母乳育児を続けるために、家族も含めた指導を受けたい】は、人工乳を推奨されてきた実母世代との価値観のギャップによって生じる家族間の要因である。また、【働く女性も母乳育児が継続できるように職場や同僚への啓蒙活動をもっとして欲しい】は、職場の要因である。そして、【不安なく母乳育児を継続するために入院中に必要な知識や技術を習得したい】、【機械的ではなく親身な援助を受けたい】、【医療者の母乳育児に対する指導内容を統一して欲しい】、【確かな技術を持った助産師に継続的にケアを受けたい】、【母乳育児を通して母親役割を遂行したい】というカテゴリーは、母乳育児を希望する母親の援助体制が十分でないことを表したものであり医療者の要因である。これらの要因に沿ってB島で母乳育児を希望する外国人女性のケアニーズの背景について考察していく。

#### 1) 家族間の要因について

家族間の要因は、自分の母親との関係の中で起こっていた。多くの場合、子育ての協力者がいることは、子育ての不安の軽減やキャリアとの両立を図るうえでは有効である。しかし、母乳栄養に対する世代間の認識のギャップは、母乳栄養を継続したいと望んでいる母親にとって時には落ち込む要因にもなる。ハワイ州B島だけの話ではなく、日本でも人工乳の栄養価が高いと言われていた時期がある。浦崎（2005）も、人工乳が良いとされてきた祖父母世代の価値観とのギャップから生じる問題を指摘している。つまり、祖父母世代から、赤ちゃんが泣く＝「おっぱいが足りないのではないか」と人工乳を勧められた場合、本来女性が欲しかった母乳育児を継続するうえでのエモーショナルサポートが実母から得られない場合も考えら

れる。そこで、助産師や看護師は、母乳育児を希望する女性だけでなく、その親に対して、母乳栄養に対する正しい情報を伝えていくことが必要だと考える。また、その際には「人工乳を与えた」という実母世代の行為を責めるのではなく、エビデンスや母乳育児を継続していくうえで家族のエモーショナルサポートが重要であることを伝えていく必要があるのではないかと考える。また、子育てという観点からみれば、父親に対する保健指導も重要である。室津（2009）は、母乳育児をする母親だけでなく、父親自身も母乳育児を行う母親や児の反応から得られる満足感を得ていると指摘し、母子を見守り支えることが父親の役割であると述べている。今回の研究協力者の夫は表1にあるように、1名を除いて、育児や母乳育児に対して理解を示し協力的であった。父親が母親の母乳育児に理解を示し支えていくことは、母親にとって、夫と共に子育てをしているという安心感を抱きやすいと考える。そこで助産師や看護師は、妊娠中から母乳育児を希望する女性のパートナーに対しても妊娠中から予期的な保健指導を行っていくことが重要であることが示唆された。

#### 2) 職場の要因について

日本では、母乳育児を行っている有職者の「育児とキャリアの葛藤」が高いことが指摘されている（我部山，2002）。アメリカハワイ州でも、仕事を持った女性が母乳育児を継続していくには理解が得られていないということが明らかになった。法律が制定され、会社の中に搾乳室を設けることが義務付けられたが、物理的な環境が整えられたとしても、それを支持する人間関係でなければ母乳育児を継続することは困難である。今回の女性の語りからは、男性だけでなく女性に対する母乳育児に関する啓蒙活動が重要であることが明らかになった。

#### 3) 医療者の要因について

3つの要因のうち、医療者の要因は大きな影響を与えていた。まず、「妊娠中からの予期的支援」、「退院後の生活を踏まえた入院中の母乳育児支援」が充分ではないということであった。そのため、退院後も不安なまま母乳育児を継続しており、新

生児のサインを読み取ったり、適切に含ませたりするなどの授乳技術の習得や自分の乳房のセルフケアもできていない状況であった。アメリカは産後の入院は2日～3日と短い。彼女たちが受けた母乳育児の援助は、「パンフレットを渡された」「巡回に来たラクテーションコンサルタントからチェックを受けた」というものであった。しかし、母乳育児技術は新生児の欲求を読み取り、抱き方、含ませ方などの技術を習得していく必要がある。そしてどういう抱き方、含ませ方が良いのか母親自身が理解できるようにポイントを説明していかなければならない。また、Rubin (1997/2012) は、母親が育児について準備し、世話をすることに熱心に取り組む時期（保持期）は、出産後2、3日～10日ごろであると述べている。取り組み始めた時期に退院を迎える女性たちに対して看護師・助産師に求められる援助は、継続して援助が受けられるような外来での対応や、日本人助産師のクリニックなどと連携してケアの継続性を図ることではないかと考える。また、母乳育児を希望する女性たちに対して、出産前教育をすることも効果的な教育になるのではと考える。クリニックの日本人助産師も、この様な予期的な関わりを妊娠中の日本人女性に対して行っていた。この母乳育児のための出産前教育のメリットの一つに、出産後に、女性が複数の人（看護師、家族、友人）から、矛盾する母乳育児に関するアドバイスを受けた場合に対処できるだけの知識と自信を獲得できるというものがある。今回の協力者の中にも、入院中の援助者から異なる助言を得たことで混乱したことを話していた。この様な予期的な取り組みが行われれば、母親が混乱することを防ぐことも可能ではないかと考える。また、今回の調査から、母乳育児を希望する女性のケアニーズは、文化的な背景からくる違いは見られなかった。これは、母乳育児が、児の成長に必要な栄養を与えることができたという母親としての役割遂行に関連する行動だからだと考える。

## 2. 日本人助産師のケアについて

アメリカA州で開業する日本人助産師は、母乳育児を希望する女性の気持ちを受容し、女性が決定したゴールに向けて継続したケアを行っていた

ことが明らかになった。母乳育児を希望する女性にとって、母親である自分をエンパワーメントしてくれる援助者の役割は大きい。今回の日本人助産師は、イギリスでの豊富な助産師活動の経験がある。

イギリスは、出産経験者の自助グループを中心に始まった活動によって、1993年の政府の出産政策の転換（Changing Childbirth）につながった。これは、女性がケアを選択し、そのケアを継続して受けられることを保障している（小嶋、斎藤、2003）。この様な社会体制の中で、母親のケアを続けてきた助産師だったからこそ、母乳育児を選択した女性のケアニーズに合わせた援助が行えたのではないかと考える。

## Ⅶ. 結論

今回、アメリカA州で行った外国人女性の母乳育児のケアニーズ調査から得られた結果は、【不安なく母乳育児を継続するために入院中に必要な知識や技術を習得したい】、【母乳育児を通して母親役割を遂行したい】、【機械的ではなく親身な援助を受けたい】、【母乳育児を続けるために、家族も含めた指導を受けたい】、【医療者の母乳育児に対する指導内容を統一して欲しい】、【働く女性も母乳育児が継続できるように職場や同僚への啓蒙活動をもっとして欲しい】、【確かな技術を持った助産師に継続的にケアを受けたい】であった。これらのケアニーズは文化の違いには左右されないものであった。そして、日本人助産師のケアによりこれらのケアニーズが満たされていた。日本で生活する外国人女性の母乳育児の援助も、これらのケアニーズを踏まえていくことが望ましいということが示唆された。

## 謝辞：

今回の研究にご協力頂いた外国人女性の皆様、ハワイの日本人助産師、スタッフの皆様に心から感謝いたします。

## 文献

Alice Z. Welch (2002)：第28章マドレンM. レイニンガー—文化的ケア：多様性と普遍性理論—近藤潤子訳。

- アン・マリーナ・トメイ, マーサー・レイラ・アリグッド編 (2010): 『看護理論家とその業績』新藤幸恵訳, 医学書院, 東京. pp.510-535.  
(Ann Marriner Tomey, and Martha Raile Alligood (2002), *Nursing Theorists and Their Work* (Copyright Mosby, Inc, St. Luis)
- 我部山キヨ子 (2002): 産後2年までの自己概念の変化 出産・育児と自己概念の関連性一, 日本女性心身医学会雑誌, 7(2), pp.212-219.
- 浦崎貞子 (2005): 母乳育児を確立・継続するための社会的要因と今後の課題ー母乳育児を継続した母親たちの調査からー新潟青陵大学紀要, 5, pp.115-140.
- グレッグ美鈴 (2007): IV. 主な質的研究と研究方法, [1]質的記述的研究, グレッグ美鈴, 麻原きよみ, 横山美江 (編) よくわかる質的研究の進め方・まとめ方. 医歯薬出版社, 東京. pp. 54-71.
- 小嶋理恵子, 尾筋淑子 (2014): 中範囲理論を実践に活用する, 第9回 母親役割獲得理論ー非効果的母乳栄養ー看護技術, メジカルフレンド社, 東京. pp.87-91.
- 小嶋理恵子, 斎藤真緒 (2003): ワークショップ「ペアレントエデュケーションの理論と実際」ー日本におけるParenting Educationの可能性ー, 立命館人間科学研究, 5, pp.237-246.
- 室津史子 (2009): 母乳育児に対する母親と父親の意識ー山陽論集, 16, pp.133-143.
- 野口真弓 (1999): ケアの受け手の認識にもとづく母乳ケア過程, 日本看護科学会誌, 19(3), pp.38-46.
- ルヴァ・ルービン (2012): 「母性論ー母性の主観的体験」, 新藤幸恵訳, 医学書院. (Reva Rubin (1997) *Maternal Identity and the Maternal Experience*)
- 杉浦絹子 (2008): 育児中の在日ブラジル人女性の日本の母子保健医療に対する認識とその背景ー日本の母子保健医療の課題に関する考察ー: 第一報, 母性衛生, 49(2), pp.236-244.



表2 母乳育児を希望する外国人女性のケアニーズ

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的な内容（コード）
1. 【不安なく母乳育児を継続するために入院中に必要な知識や技術を習得したい】	<p>&lt;入院中から母乳育児を継続するために必要な知識や技術を習得したい&gt;</p> <p>&lt;児の成長に合わせた母乳育児の方法を知りたい&gt;</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・(入院中は) ラクテーションコンサルタントが巡回して、吸い方をみて「良い」と言ってくれたが、家に帰ったら何が「良い」のかわかっていなかったことに気づいて不安だった。それを教えて欲しかった。</li> <li>・入院中は(母乳育児に対して)、説明やケアを受けていない。免疫があるとか、吸わせると母乳が分泌するとか、それを教えてもらえれば頑張れると思う</li> <li>・児が成長してくると飲み方が変わってきて、これで良いのか不安になった</li> </ul>
2. 【母乳育児を通して母親役割を遂行したい】	<p>&lt;母乳育児を通して母親役割を遂行したいという思い&gt;</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の中でおっぱいをあげるということは母親として理想のことだったので、(日本人助産師は)それをゴールにしてくれたので、ここに通えばそれができると信じていた。</li> </ul>
3. 【機械的ではなく親身な援助を受けたい】	<p>&lt;機械的な対応ではなく親身な対応をして欲しい&gt;</p> <p>&lt;困った時にすぐに相談したい&gt;</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最初に行ったクリニックは、話しても「はい、はい」というだけで機械的な感じでの対応で、受診した後も不安でいっぱいだった。</li> <li>・(日本人助産師)は、良き友であり、彼女はとてもオープンで、相談や悩みがあれば、すぐに相談できる。</li> </ul>
4. 【母乳育児を続けるために、家族も含めた指導を受けたい】	<p>&lt;親世代に対しても母乳育児のメリットについて教育をして欲しい&gt;</p> <p>&lt;母乳中心の生活にするために家族間のサポートが得られるようにして欲しい&gt;</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・(母乳や人工乳の) メリット・デメリットさえも知らなかった。自分の親の世代はミルクを推奨されてきたから、母乳育児を中心に考えて生活を組み直すという発想もない。ここ(日本人助産師のクリニック)に来て、それがわかった。</li> <li>・(母乳育児を続けるために) 親からも病院からも、精神的なことを教えてもらえなかった</li> <li>・母乳育児の効果があるということは何となくは知っていたけど、(ラクテーションコンサルタント)は、その効果を周囲の人にも伝えて欲しかった。</li> <li>・ただ単に母乳育児を希望する女性だけに教えるとかではなくて、家族にもケアや指導が必要。私が、日本人助産師から学んだこと。</li> </ul>
5. 【医療者の母乳育児に対する指導内容を統一して欲しい】	<p>&lt;根拠を踏まえた指導をして欲しい&gt;</p> <p>&lt;看護師間で指導内容を統一して混乱しないようにして欲しい&gt;</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・(1歳半の子どもの健診時に) 小児科医から、「いつまで母乳をやっているんだ、栄養は他からももらえるから、もうやめろ。」と理由も説明せずに叱られた。</li> <li>・入院中、病室にくる看護師さんたちが(母乳育児について) 違うことを言うので混乱した。</li> </ul>
6. 【働く女性も母乳育児が継続できるように職場や同僚への啓蒙活動をもっとして欲しい】	<p>&lt;男性の上司に母乳育児の重要性について理解して欲しい&gt;</p> <p>&lt;職場に搾乳の場所を作って欲しい&gt;</p> <p>&lt;母乳育児を継続するために搾乳することを同僚に理解して欲しい&gt;</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大統領が法律をつかったけど、職場の上司が男性で搾乳のことを理解してくれない。</li> <li>・女性の同僚にも理解してくれない人がいる。</li> </ul>
7. 【確かな技術を持った助産師に継続的にケアを受けたい】	<p>&lt;母乳育児に対するケアを継続して受けたい&gt;</p> <p>&lt;乳房トラブルを予防するために確かな技術を持った助産師にケアを受けたい&gt;</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ここまで長く(2歳7ヶ月)授乳ができるとは思わなかった。1年続ければ良いかなという感じだった。2週間おきに詰まりやすくなるのでマッサージを受けていた。</li> <li>・アメリカでは多くの人が安易に人工乳を与える。それは簡単で便利だと思っているから。だから、ここでは「母乳をあげたい」という強い思いを持たなければ続けられない。彼女みたいに母乳栄養を継続してケアしてくれる助産師がもっと増えると母乳の率も高くなると思う。</li> <li>・最初のマッサージの時に、乳栓を出してくれたので、ここではそういう技術を持っている人は彼女しかない。</li> </ul>